

第12分科会

岐阜県立岐阜本巣特別支援学校



所在地 〒501-1184 岐阜市西秋沢2-363-1
校長 板倉 寿明
児童生徒数 193名（50学級）
連絡先 TEL 058-239-9712 FAX 058-293-9022
E-mail c27398@gifu-net.ed.jp
URL [http:// school.gifu-net.ed.jp/
gifumotosu-sns/](http://school.gifu-net.ed.jp/gifumotosu-sns/)

【研究主題】

児童生徒の豊かな心と体を育む授業づくり



1 研究の概要

(1) 研究主題

本校児童生徒の実態は、個々には体を動かすことを好むが、仲間との関わりや集団としての活動には苦手な面が見られる。しかし、活動に対する見通しがもてれば、安定して活動に取り組むことができる。このような本校児童・生徒の実態を踏まえ、学習指導要領の目標達成に向け、本研究では他者と、様々なかたちで関わりをもつための「豊かな心」と、それを支える「体」を育むことに焦点を当てた授業づくりの在り方を探求することとし、研究主題を設定した。

(2) 研究仮説

平成24、25年度の教育実践の成果と課題を踏まえ、ねらいに迫るための支援の手立てに関する考え方を全職員で共通理解した。

- ① 児童生徒一人一人の実態に応じ、視覚支援を活用する。
- ② 授業の流れを一定にし、同じ題材にじっくり繰り返し取り組む。
- ③ 児童生徒一人一人の実態に応じた、自分で操作しやすい教材教具の工夫等を行う。
- ④ 毎時間の健康チェックに基づき、安全面と運動量を確保し、運動を楽しむための支援や主体的に仲間と関わる支援を取り入れる。
- ⑤ 小・中・高の系統性を考え、支援方法の連係、評価方法を工夫する。

上記から児童生徒の実態に応じて必要な手立てを講じることにより、各学部のねらいに迫り、他者と関わりをもちながら主体的に活動することができる「豊かな心」と、それを支える「体」を育むことができるのではないかと考える。

(3) 研究内容

児童生徒一人一人の課題に迫るために、小学部5グループ、中学部5グループ、高等部5グループの合計15グループに分かれて研究を進める。各グループの研究テーマは以下のとおりである。(26年度のテーマを示す)

グループ		研究テーマ	
小学部	知1～2年	児童が進んで取り組んだり、楽しんで取り組んだりできるような体づくり(体育)の指導・支援の在り方(②)	
	知3～4年	児童が意欲的に活動することができる指導・支援の在り方(②)	
	知5～6年	児童が意欲的に活動することができる指導・支援の在り方(②)	
	ひまわり(肢・病)	分かって自分で動かすことができるための支援の在り方(③)	
	あじさい(複)	歩行による移動能力向上のための支援の在り方(②)	
中学部	知1年	生徒に応じた基礎的運動技能を身に付け、仲間と関わり合いながら取り組む体育の授業を目指して(②,④)	
	知2年	生徒一人一人が仲間と共に生き生きと活動する授業の在り方～次のめあてにつながる評価の在り方～(③,④,⑤)	
	知3年	仲間と共に生き生きと活動する体育の授業を目指して(②,④)	
	肢・病	個のもてる力を発揮し、運動を楽しむ「心と身体・運動」の支援の在り方(②,③,④)	
	重複	見通しをもち主体的に身体を動かす姿を目指した支援の在り方(②)	
高等部	知	A(1年) B・C (2・3年)	自ら進んで体を動かし、仲間と運動する楽しさを味わうことができる体育授業の在り方(②,③)
	重複	D	重複障がいをもつ生徒へのコミュニケーション支援の在り方～タブレット端末を活用して～(②)
	肢・病	E	自己を見つめ、健康で豊かな生活を目指そうとする力を育む授業の在り方～自立活動の時間の指導を通して～(②)

注) 知：知的障がい学級 肢・病：肢体不自由・病弱学級 重複：重複障がい学級
研究テーマ内の①～⑤は岐阜県の実践的研究内容との関連を表している。

2 公開授業

(1) 中学部 第2学年(知的障がい) 保健体育「球技 ～サッカー～」

授業者： 小林 久範 教諭

(2) 高等部 第2～3学年(知的障がい) 保健体育「球技 ～サッカー～」

授業者： 足立 圭太 教諭

3 研究協議

- (1) 提案 司会者 : 渡辺 正 教頭
発表者 : 山内 康弘 教諭 今岡 聡子 教諭
若井 俊輔 教諭 吉田 徹 教諭

①研究経過発表

- ・平成24年より取組を始め、研究の組織は、児童生徒の実態の違いを考慮し、小学部・中学部・高等部、それぞれの学部別とした。
- ・校内準備委員会を設け、定期的に授業内容の改善のための課題を整理し研究会運営上の課題を検討した。
- ・各研究グループで研究の仮説を設定し、研究実践に取り組んだ。各学部での共通の課題は、岐阜県教育委員会特別支援教育課による学校支援訪問の機会に、全校研究会での授業研究の結果を中心にまとめた。
- ・25年度の研究全体の仮説1・2・3は、1年目小学部・中学部・高等部の共通の効果的支援から位置づけた。4・5は、1年目各学部の共通の課題から位置付けた。
- ・2年目の研究実践では、岐阜県教育委員会特別支援教育課に加え、現西濃教育事務所広瀬 満先生に指導、助言を仰ぎ授業改善に取り組んだ。
- ・3年目の平成26年度には、研究仮説と研究組織を継続した。東海大学の内田 匡輔先生の指導助言を仰ぎ、2回の事前指導では、研究授業改善のための課題やアドバイスをいただいた。

②授業説明及び成果と課題

< 中学部 >

- ・生徒の「運動経験や日々の運動量が少ない」原因は、地域の学校の生徒に比べ、登下校時の自力通学が少ない、外遊びのできる休み時間が少ない、部活動の時間が限られているなどがあげられる。
- ・準備運動の工夫では、3つのグループを設定し、毎時間、授業の最初にサーキット運動を行ってきた。徐々に取り組む活動内容、種類を増やし、現在に至っている。
- ・ゼッケンのお腹の部分に、生徒一人一人の目標とする周回数マークをあらかじめ貼っておき、1周するごとにマークを1枚ずつはがしていくようにして、生徒はマークを全部なくそうというねらいをもって取り組んできた。
- ・マークを使用した即時評価の実施では、生徒の頑張りを見過ごすことなく評価し、生徒自身も数値的に毎時間目標をもって取り組むことができるようになり、この評価を通して仲間との関わりが増えると良いという教師の思いから考えた方法で3年前から取り組んできた。
- ・教師側もマークがあることで、誰を支援したら良いかが分かりやすくなった。
- ・今回の研究を通して、体育活動における準備運動、運動量の確保ができ、実態に応じた手立て、教材教具の工夫など多くのことを学んだ。特に、マークによる即時評価の実施により「できたね」と生徒にその場で伝える機会が増えたことは、生徒が達成感を味わって良かった。今後も生徒が頑張ることができ、楽しむことができる授業づくりをしていきたい。

< 高等部 >

- ・高等部「保健体育の年間計画」では球技が好きというアンケート結果から年間指導計画を見直した。
- ・生徒の運動量を確保し、安心・安全に取り組むために運動能力等に合わせたグルーピングを行った。
- ・ルール工夫では、足でボールを扱って連係に取り組むことが機能的に難しいため、ポストプレーヤーのみ手でボールを扱えるようにし、時間と余裕をもたせるルール工夫をした。
- ・グループの実態に合わせて段階的に学習が進められるよう、横への広がり、縦への広がりが身に付けられるように設定した。
- ・サッカーだけではなく、どの単元でも授業の流れを一定にするよう心掛け、生徒が活動内容を理解し、準備、体操、片付けなどが自主的に取り組む力を身に付けられるようにしている。
- ・運動動作のイメージがもちやすい言葉掛けの工夫にも取り組んできた。パスなら「ボン」、シュートなら「ドン」など、イメージがもちやすいようにし、スムーズな運動動作につながられるようにした。
- ・連係プレーについても、ボールをもったプレーヤーに次の動きがイメージしやすいようにリズムカルな言葉を掛けることで連係の相手を意識した動きが期待しやすくなるようにした。
- ・スキルアップドリルの工夫を行い、個人技能のポイントについて実際の写真を用い、視覚的に提示した。毎回ドリルを仲間同士で確認することで技能の向上だけに留まらず、名称や、個人技能のポイントについて知識・理解を深められるようにした。
- ・ポイントを理解することで仲間に対して適切にアドバイスできるようにした。評価規準にある運動技能についての思考・判断の評価につながるようにした。

- ・ 本時の授業においては、授業実践の中で、仲間同士で関わる場を多く設定したり、言葉掛けを行う際のポイントを明確にしたりすることで、活発に言葉を交えながら練習やゲームに主体的に取り組む姿が見られるようになってきた。
- ・ スキルアップタイムで練習した連系の動きを理解して、連系プレーを意識して取り組もうとする意欲が高まってきた。
- ・ 研究テーマでもある自ら進んで身体を動かす姿、仲間と運動する楽しさを味わえる姿を目指し、分かる、できる、楽しい授業実践を、年間を通して行ってきた。
- ・ 対象グループの新体力テストの25年度、26年度の点数を平均化したものでは、課題であった、敏捷性、平衡性、巧緻性等の調整力の伸びという成果を得ることができた。
- ・ 課題では、技能などの習熟度を把握し、実態に応じて生徒に分かりやすい手立て、ルール工夫等を行い、指導計画を組み立てる必要がある。
- ・ 今回の研究を通して、体育活動における運動量の確保、視覚支援、実態に応じた手立て、教材教具の工夫、評価方法など多くのことを学ぶことができた。生徒たちにとって体育が楽しい、運動することが楽しいと思える、そして、生徒が健康で豊かな生活を送ることのできる力を育む授業づくりに励んでいきたい。

(2) 協議内容 (□…質問・意見・感想)

※ 回答は、授業者 (小林教諭, 足立教諭)

及び発表者 (山内教諭, 今岡教諭, 若井教諭, 吉田教諭)

- 高等部サッカーについて、ポストプレーのときは手で触って良いという特別ルールをつくった経緯と、ルールをつくる前とつくった後の生徒の様子の違いを教えてください。
- A 周りの状況を把握して情報を収集し、どこにパスを出そうかという判断と実行は、技術を問われる。この技術の難しさを補うために、今回は、手で扱う方法を設定している。学習指導要領にもあるが、ルールの工夫を行うことで、生徒たちが自らポストプレーの動きを目指すような工夫をした。生徒の変容について、動きをスキルアップタイムで練習していたが、なかなかゲームで動きが生かされない。周りの状況が見えず、「団子サッカー」が多かった。手で扱うという特別ルールをつくったことで、横への広がりや縦への広がりを意識して取り組む姿が増えてきた。A、Bチームでは、本日の授業で、それほど手でボールを扱う姿は見られなかった。生徒自身が成長している。ボールをもらったときにサイドにパスを出せば良いということが生徒自身分かってきて、手で扱わず足の方が速いと判断しているので、これは一番目指す姿に変容してきたと考える。
- 重度重複学級では、身体活動を自立活動か体育なのか、教育課程上どのように扱っているか、運動、体、身体活動をどのようにとらえ、どのように扱っているか事例を教えてください。
- A 重複障がい学級では体育に限らず実態に応じて自立活動を中心に本研究を進めている。例えば、24年度の小学部の重複障がい学級では、友達と関わる力を育てる支援の在り方 (自立活動における学級遊びから) というテーマで取り組んだ。また、小学部肢体不自由・病弱グループでは、心理的に安定した状態で仲間と一緒に楽しく学校生活を送るための支援の在り方というテーマで取り組んだ。重度重複グループでは、自立活動の「ふれる」の分野の授業づくりの中で、心と体を育む授業づくりを障がいの状況にあった形で取り組んできた。
- 中学部、高等部の授業で、それぞれ生徒同士が作戦タイムやチームでミーティングをしている場面が印象に残った。生徒同士の関わりを日頃からどのように取り組んでいるのか。体育を通じて育てているのか、それ以外の学校の教育活動の中で仕組んでいるか教えてください。
- A 生徒同士の関わりについては、日常の学校生活でもとても大切にしている。本グループの2年生は1組、2組があり、各学級に、友達に言葉をよく掛けたり、仲間の手伝いを頑張ったりする生徒が2～3人いるので、その生徒たちを中心に見守ることを大切にしている。教師側から生徒への言葉掛けや支援を行わず、待つことで、生徒の中から教師をまねて生徒同士が言葉を掛ける姿がある。それを大切にし、「その言葉掛け素敵だね」とほめてどんどん評価し、仲間との関わりを高めて今に至っている。
- A 体育の生徒同士での関わりということで、本時では、学習ノートでの話し合いがあった。ノートの工夫や、学習ノートでの話し合いで、生徒全員の意見が出るように、グー、

チョコキ、パーで自分の意思を確実に提示し、みんなの意見を集約して反省につなげていくというように生徒同士のつながりを作り、関わり合える工夫をして体育に取り組んできた。

- 小、中、高とも、テーマにしているところで「楽しむこと」が共通してあった。楽しさはどのように評価するのか教えてほしい。また、子供たちに楽しみを感じてもらうには、パスをしたりシュートをしたりというのがあるが、サッカーの専門用語で連動というキーワードがあるが、守備のときに連動して動く、もう少し仲間との協力を学んでほしい点だが、そのあたりはどうしていたか。

A 楽しさの評価について、24年度に小・中学部のある授業の様子をビデオに撮り、課題を見つけた。そのとき、先生の説明を聞いている時間が長い。そして子供たちがじっと座って活動していない姿があるという課題が出てきた。このことから、子供が楽しんでいる姿を引き出せないか、運動量をもっと確保できないかという課題が出てきた。体育で生徒が楽しむという様子は、「たくさん活動している」、「喜んで笑顔で活動している」、「進んで活動している」、「楽しく自主的に活動している」と「自然と汗をかく」といった生徒の様子から楽しさを今まで評価してきた。例えば、今日の中学部の体育の様子でいうと、授業が始まっていないのに、自分から道具を用意して、跳び越えたりして活動をしている。このような姿は、以前は見られなかった。どんどん自分から進んで活動し、休み時間にも、つるしてあるペットボトルにジャンプして遊んでいるという様子から楽しさを評価してきた。

A 本授業では、グッドマークを用いて毎回シュートの数をGoodで評価し、そのGoodの数が前回を超えて頑張ったと評価しているとき、前回と今回の数を比較し喜ぶ姿が楽しいことの一つであると考えている。中学部2年生なので、まずはサッカーの醍醐味であるシュートを決めるということに重点を置いてグループ練習、チーム練習に励んでいる。サッカーボールを蹴ることが不慣れだったので、一貫してシュートをする、シュートを決めることを目的に最初から活動を仕組んできた。守備は、授業の中では特別な練習は設けていないが、試合をやっていく中で良い守備が生まれたり、良い動きが見られるようになってきたので、そのときはグッドマークでは評価はしないが、その子に「今の守備良かったよ」「1点防いだね」と言葉を掛けて即時評価をした。

A 守備についてスキルアップタイムでは取り組んでいないが、ゲームの中で、その場その場に応じて指導をしている。実際に行っているのは、マンマークという守備方法とゴールとボールを結ぶところで、簡単にゴールを決められてしまったときに笛を吹いて、「ここに立っていたら決められなかったよね」とゲームを実際行う中で直接的な指導で守備について行っている。中学部でもあったが、基本的には攻撃面の練習をたくさんして点を取る喜びや楽しさを感じられたらよいと考え、授業をしてきた。

- 研究仮説に小・中・高の系統性と載っているが、3年間の中で仮説の通り本当によく研究されていると感じるが、学部を超えた系統性をどういったところでどういう組織で研究してきたか。小学部から中学部、中学部から高等部のつながりで系統性はどうやってつめていったのか。

A 24年度に各学部の全部で12の小グループで検討してきた。研究全体の中で、共通して効果のあった支援、共通の課題をまとめて2年目の平成25年度から研究全体の仮説としてこれを取り扱った。つまり、全てのグループで効果のあった支援を全てのグループで継続していこうということである。また、多くのグループで課題となった点は、全体で取り組んでいこうということで、研究内容の系統性についてこのようにとらえた。具体的にいうと、24年に効果のあった支援として、視覚支援の活用、繰り返しの指導、教材の工夫について効果があったのでそれを全てのグループで取り入れた。仲間への関わりについては、最初の児童生徒全体の実態にもあったが、なかなか関わるのが難しいという実態があるので、関わりの点や運動量の確保、評価方法の工夫を共通の課題として小・中・高全体で取り組むこととして、これをまず一つめの研究内容の系統性ととらえた。次に授業内容の系統性について、今回研究授業で取り上げた中学部、高等部の授業で事前指導が2回にわたって行われた。授業改善の中で、内田先生から中学部、高等部の授業を見てもらうだけでなく、小学部の授業も見えていただいた。その中で、研究

紀要にある小学部で実践しているスケジュールボードをなぜ研究授業で使わないのかとご指摘いただき、小、中、高で使うようになった。そして、今回の授業の中でもスケジュールボードを使用するようになった。これを導入するようになり教師の説明を少なくしたり、活動内容を分かりやすくしたりして、見通しをもちやすくするという一方で、結果的に運動量の確保につながり、学校全体での授業改善に取り入れて、系統性をもたせていった。さらに、教師の共通の視点と指導計画が課題となってくる。グループ内の教師の授業評価規準の系統性はできているが、他学部の方が見ても同じように評価できるかの検証については、本研究ではまだ十分にしておらず、この点を今年度の研究のまとめの段階でどのように検証し改善していくかが課題である。

- 発表の中で、日々の運動やスポーツ活動が健常者に比べ少ないとのことだが、学校の先生方で、日頃、生徒をたくさん見ている、日常活動で運動やスポーツ活動につなげるためや日常のスポーツ活動に取り組む上でのポイントやアドバイス、見ていることは何かあるか。

A 小学部の児童には、知的障がい、重複障がい等の児童がおり、健康状態は様々である。自分が担任する知的学級では、他の学年と一緒に、意図的に体を動かすため、毎朝、運動場や体育館で走っている。決まった曲を使って走ったり歩いたりしている。児童の変化は相当あり、一人では捕まっていけなかった子が、手を離して一人で心拍が上がるくらいのペースで走り続けることができるようになった。それと同時に、跳び箱に乗って上から手を着かずに自分で跳び降りができるまでになった。運動能力全体が上がっていると感じる。また、肢体不自由で歩行が困難だった児童にも、教師が歩く必然性をつくり職員室にお使いに行ったり、校内のいろいろな場所にマークを取りに行ったりする学習活動を仕組み、毎日毎日、シンプルだが歩くという活動を取り入れている。生活単元学習での買い物学習でも意図的にバスに乗らず3区間くらい歩いて行くなどしている。

A 中学部の実態は様々で、それぞれのクラスで違ってくるが、自分が担任するクラスでは肥満傾向の生徒がかなり多い。朝は、意図的に外に出て身体を動かすようにしている。ブランコが好きな生徒にはブランコ、自転車好きな生徒には自転車乗りなど、環境や道具を使って身体を動かすようにし、少しでも肥満防止に取り組んでいる。

A 高等部では1年生の段階で1年間、带状の日課で朝、体育館で体づくりの活動をしている。ランニングやストレッチを行い、1年間を通して体力の向上を図っていきこうと取り組んでいる。また、中学部、高等部では部活もあり、外での対外的な活動については、岐阜県の障がい者スポーツ大会などの案内を中学部、高等部の全員に配布している。希望のある生徒や、1人ではなかなかできない生徒には、一緒に活動している。自分のクラスでは、卓球に出るといふ生徒がいたので、教室に卓球台を持ち込んでクラス全員で卓球大会をするなどの取組をして、活動に参加できるようにしている。

(3) 指導講評 指導助言：東海大学准教授 内田 匡輔 先生

◎ 中学部も高等部も子供たちが非常によく動いているという感想をもった。今日に至るまでに、まだまだ動けていなかった授業もあった。その時期から子供たちが非常ににこにことして笑顔でハイタッチをする姿やゴールをして先生に抱きつく姿があるので、授業が変わっていく最後のところだけでなく、そこに至った経緯まで汲み取ってもらえたのではないかなと思う。

◎ 高等部の授業でさらに良くなるためには、良いプレーをしたときに先生がグリーンカードをサッと出す。それがあると子供たちはこれが良かったんだと分かる。

◎ 良い授業は「子供の歓声がわき上がり」「賞賛の声がわき起こり」「励まし合いや教え合い」の姿から観察される。こういったことを私たちは体育の授業として、共通認識をもって臨みたい。これは特別支援であろうが、障がいであろうがなかろうが同じことだと私は考えている。

◎ そのために教師は何をするか。「意味のあること」を「熱意をもって」「上手に」教える必要性がある。



- ◎ 「意味のあること」、それは、将来への展望がもてる活動。例えばオリンピック、パラリンピックも良いが、そうではなくて、地域のスポーツセンターで活動ができる。サッカークラブに入って、そのためにちょっとお金を稼いでみようかなとか、何か将来やってみたいことが見つかるとか、国体や全国障がい者スポーツ大会に出るといいうのも将来の展望だと思う。
- ◎ 「熱意をもって」それは、特徴、特性、障がいへの視点をもつということにほかならない。子供たちのニーズに応じていくという視点のもち方である。
- ◎ 「上手に」それは、スモールステップを大切に。「できた」、「上手くなった」、「やったよ先生」ということがあれば応えられる。それを私たちは、どのように考えていくのか。
- ◎ 生徒がいて、スポーツがあると私たちはつい生徒が何かをやっていて失敗をする。そこを見ていやだなと生徒が感じたのを見て、やる気がないなと考えてしまいがちになる。この見方をすると何が起こるか。実は、どんどん体育嫌いになっていく。
- ◎ そこで、私たちは生徒をよく見ることが大切だ。そしてスポーツもさらによく見ることである。サッカーというものをよく見る必要がある。その上で、やってみようかなという課題を提示する。ここが授業の前の段階である。その上でできるというものが入ってこればしめたもので、さらにレベルを変えていく、その上でアイデアを積み上げていく。このことを私たちが作り続けていく必要がある。

4 成果と課題

各学部のグループにおける、児童生徒の「豊かな心と体」を育む取組における変容を概観してみると、体育や運動への意欲が見られ、楽しく体を動かす姿が各学部で共通して見られた。また、小・中学部では主体的な活動が顕著に見られ、中学部・高等部においては仲間との関わりで多くの変容が見られた。

中学部、高等部での公開授業の実践の中では、以下のような具体的成果と課題を確認した。

(1) 成果

① 児童生徒が主体的に活動する姿

- GOODマークで評価することで、前回のマークの数を超えようと活動したり、超えたときに喜んだりする姿が見られた。
- マークの少ない生徒を把握でき、支援に向かったり、確実に生徒の頑張りを評価したりできるようになった。
- 活発に言葉を交えながら練習やゲームに自主的に取り組む姿が見られるようになった。

② 仲間と共に運動する楽しさを味わえる姿

- 生徒間でのパスが増え、たくさんの生徒がボールに触ることができるようになってきた。
- 連係プレーを意識して取り組もうとする意欲が高まってきた。また、動きから得点がうまれるようになってきた。

(2) 課題

- 試合の際、どの生徒も活躍の場があり、かつ、生徒が不公平感を感じない特別ルールのあるさらなる追求と実践をすること。
- 休み時間でも「身体を動かしたい」と思うことができるような準備運動（サーキット）や活動を追求すること。
- 数値的な評価を他の子と比べてしまう生徒への評価方法を工夫すること。
- 生徒に分かりやすい手立て、ルール、支援方法について工夫していくこと。
- 生徒が分かりやすい具体的な言葉掛け、即時評価のできる具体的な言葉掛けについて、さらに研究を進めること。

本研究及び公開授業で得られた成果と課題を全職員で共有し、今後も児童生徒の豊かな心と体を育む授業づくりに生かしていきたい。